**復活節第4主日礼拝説教　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年4月30日**

**「主から逃げる」**

**ヨナ書1章1～16節**

**1:1 主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。**

**1:2 「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」**

**1:3 しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。**

**1:4 主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった。**

**1:5 船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた。**

**1:6 船長はヨナのところに来て言った。「寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。」**

**1:7 さて、人々は互いに言った。「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。」そこで、くじを引くとヨナに当たった。**

**1:8 人々は彼に詰め寄って、「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいか。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。**

**1:9 ヨナは彼らに言った。「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」**

**1:10 人々は非常に恐れ、ヨナに言った。「なんという事をしたのだ。」人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。**

**1:11 彼らはヨナに言った。「あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか。」海は荒れる一方だった。**

**1:12 ヨナは彼らに言った。「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」**

**1:13 乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。**

**1:14 ついに、彼らは主に向かって叫んだ。「ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したといって責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」**

**1:15 彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海は静まった。**

**1:16 人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。**

**マルコによる福音書**

**14章51～52節**

**14:51 一人の若者が、素肌に亜麻布をまとってイエスについて来ていた。人々が捕らえようとすると、**

**14:52 亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった。**

**今日から第5主日には旧約聖書のヨナ書から共に御言葉に聴いていきたいと思います。ヨナ書と言えば魚に飲み込まれたヨナさんというのを子どもの頃教会学校で聞いた方もおられるでしょう。そうでない方も、ヨナ書はディズニーで映画化された「ピノキオ」の小説の元になったと聞くと身近に思われると思います。ヨナ書はわずか4章しかない短い物語ですが、神様はこのヨナ書を通して私たちに大切なことを語りかけて下さっています。共に御言葉に聴いていきたいと思います。**

**預言者ヨナが活躍した時代は紀元前8世紀頃、アッシリア帝国が北王国イスラエルを脅かしていた時代です。ある日預言者ヨナに神様は語りかけます。「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」(2節)**

**ニネベというのはアッシリアの都市の名前です。そのニネベに行って神様の言葉を告げよと言われます。聖書が言う預言者は将来のことを予言する人とは違います。預言の預は預かるです。神様の言葉を預かって、その言葉をそのまま人々に伝えるのが預言者の務めです。しかし驚いたことに預言者ヨナは神様から逃げるのです。預言者と呼ばれる人は聖書にたくさん出てきますが神様から逃げた預言者はヨナ一人だけです。**

**神様が言われたニネベに向かわずにタルシシュに向かってヤッファに下った。これを文字だけで読んでいると何が何だかよくわかりません。そこで私たちが聖書を読む助けになるのが巻末の聖書地図です。「１聖書の古代地図」をご覧ください。今ヨナがいるのが真ん中の「カナン」という地域です。そして「ヤッファ」は地図にはありませんが、カナンという文字の「ナ」のあたりにある港町です。ニネベがどこかと言いますとずっと右のほう、方角で言うと東の方に「バビロン」があります。そのちょっと上に「アッシリア」とあり、そのすぐ上に「ニネベ」という町が川沿いにあります。神様が行けと言われたのはこの町です。しかし、ヨナが神様から逃げるために向かったのは「タルシシュ」です。タルシシュは地図にはありませんが現在のスペインのどこかです。もうずっと西の果てです。陸路を通ってはるか東の町ニネベに行けと言われたヨナは、舟に乗って全く反対方向の西の果て当時の世界の果てです、そんな世界の果てに逃げようと舟に乗って向かったのです。いかにヨナの抵抗が強いかがわかります。**

**けれども神様はそんなヨナを逃がしません。嵐を起こして舟を転覆させようとされたのです。船乗りたちはそれぞれ自分の神々に助けを求め積み荷を捨てますが舟が沈みそうなのは変わりません。船底で寝ていたヨナに船長や他の船乗りは詰め寄りくじを引いてこの嵐は誰のせいかを決めるとヨナに当たります。ヨナは自分の身を明かして言います。**

**「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」(9節)**

**これだけ立派に告白するならばなぜ神様から逃げるのかと私たちは思いますが、ヨナの告白と白状に人々は嵐が静まる方法をヨナに問います。ヨナは「私を嵐の海にほうり込め。嵐の原因は私だから」と言います。人々はそのようなことをすればヨナは命を失い自分たちは大きな罪を犯してしまうことを恐れました。しかし、ついに主なる神に叫び祈るのです。**

**「ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したといって責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」（14節）**

**最初は自分たちそれぞれの神々に祈っていた人々が天地創造の主なる神に祈ります。御心が行われますようにと主の御心を求めて祈るのです。そしてヨナを海にほうり込むと嵐は静まります。そして今日の最後16節「人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。」これは礼拝です。主に祈り、主を礼拝するのです。神様に逆らってタルシシュに逃げたヨナが思いもかけない出来事を通して他の神々を礼拝していた人々を天地創造の神様に立ち帰らせたのです。**

**神様から逃げたヨナ、しかし逃げたことによって神様を信じ神様に立ち帰った人たちが生まれました。これはいったい何を意味しているのでしょうか。このヨナの物語を通して神様は何を私たちに語りかけようとしておられるのでしょうか。**

**この物語で注目すべきはやはり3節です。**

**「しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。」**

**ここには、ヨナが主から逃れようとしたことが記されています。よく読むと「主から逃れようと」という表現が2回あります。「しかしヨナは主から逃れようとして出発し」と「人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。」これは2回なくても意味は十分に通じます。「しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで、タルシシュに向かった。」**

**これでも十分に文章としてなりたっていますし、むしろこの方が文章としてはスッキリします。でも聖書には「主から逃れようと」が2回記されているのです。それがどうしてかを考えますと、やはり何としてでも主から逃れたいヨナの強い思いを表現していると思われます。逃げたい、逃げたくてたまらない、その強い思いを現わしているのです。どうしてそこまで主から逃げたいのかは読み進めていけないとわからないことですが、とにかくヨナは逃げたくてたまらないのです。**

**では神様はそんなヨナを逃がして下さるでしょうか。答えは否です。舟に乗ってタルシシュに逃げたヨナです。折よくタルシシュ行きの舟が見つかり船賃を払って乗り込み、人々に紛れて舟が出発したとき「やった。これでニネベに行かなくて済んだ」と安堵したでしょう。でもそんなヨナを神様は嵐を起こすという方法で逃がさなかったのです。どこまでも追いかけたのです。それは神様がヨナを愛して下さり預言者として召し出し、ヨナを豊かに用いようとされたからです。嵐の中海にほうり込まれたヨナは全く思いもかけない形で神様に用いられたのです。神様はどこまでもヨナを捉え、全く思いがけない形でヨナを人々を神様に立ち帰らせるために豊かに用いて下さったのです。**

**それは私たちの歩みにおいても同じです。私たちもヨナと同じように神様から逃げます。あの手この手を使って、なんだかんだと言い訳をして逃げるのです。「ニネベに行け」と言われたヨナが反対方向のタルシシュに逃げたように、神様から命じられたのとは全く反対方向に逃げるのです。「こっち」と言われたのに「あっち」に行くのです。するとそれが止められてしまったり、その思いがけないところで用いられることがあるのです。そしてめぐりめぐって結局神様の元に帰ってくるのです。それはつまり神様からは逃げられないのです。私たちが逃げたと思っても神様からすれば逃げていないのです。神様は私たちを愛して下さり私たちをしっかりととらえて下さっているのです。**

**今日の新約聖書にイエス様について来て亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった若者のことが記されていますが、これはこの福音書を記したマルコ本人です。マルコはペンテコステに聖霊が降り教会が誕生した後教会の重要なメンバーとして歩んでいました。第一次伝道旅行にはパウロとバルナバと一緒に伝道に出かけました。しかし、マルコはすぐに家に帰ってしまいました。理由ははっきりわかりませんが過酷な伝道旅行に耐えきれなくて逃げたのです。第2次伝道旅行にパウロはかつて逃げたマルコを連れていきませんでした。役に立たないからです。でもバルナバはあえて逃げたマルコを伝道旅行に連れていきました。マルコはそこで様々な経験をし、後にパウロから「マルコを私のところ連れて来て下さい。彼は私の役にたつから」（Ⅱテモテ4：11）と言われるまでになりました。マルコは逃げました。イエス様から、パウロから、伝道から、そもそも神様から逃げました。でも神様はマルコを逃がしませんでした。マルコをしっかりととらえていてくださり、「いらない」と言われたパウロから必要とされ、さらにはマルコによる福音書を書くまでに用いられました。**

**神様は私たちを決して逃がさないのです。逃げた私たちを豊かに用いて下さるのです。**